

## 論文の和文要旨

論文題目 アフマド・シャームルーの非韻律詩の詩学と  
リズム構造の分析

氏名 前田 君江

### はじめに

本論文は、20世紀のイランを代表する詩人であるアフマド・シャームルー Ahmad Shāmlū (1925-2000) の she'r-e mansūr 「非韻律詩」創出をめぐる詩学と、詩の構成技法を含めた「リズム」の分析を主題とするものである。

シャームルーの作品は、第一に、叙事詩的なリズムを特徴とする「抵抗の詩」として位置付けられる。闘争的とも評される彼の言葉は、人間の力強さを高らかに謳い上げながら、同時代の政治犯たちへの拷問と収監、処刑、そして、彼らへの追悼と鎮魂を繰り返し歌い続けた。しかし、同時に、シャームルーの「愛の賛歌」の時代以後に顕著に見られる、事物の存在性に依拠した濃密な詩的空間は、無関係なモチーフの混交や、主に平行構造によって創り出される独自の時間性と隠喩の構造、非収束的な作品構成によって、“原風景”の再現とも言える詩的空間の創出を可能にしている。それは、ことばとことばの間を掴み取ろうとする詩人の試みでもある。

以下に、本論文の目的と、構成について述べる。

## I. 本論文の目的

本論文の目的は、以下の4点である。

### 1. 文学的伝統への抵抗

シャームルーは、イランの前体制であるパフラヴィー王朝、および、現イラン・イスラーム体制を通じての「抵抗詩人」として知られ、とくに、欧米におけるシャームルー研究においては、彼の詩に見られる政治的抵抗のメッセージが、主たる研究対象とされてきた。しかし、シャームルーを「抵抗詩人」の枠のみに当てはめようとするのは、彼の一連の文学行為を一面的に捉えるものである。シャームルーは、同時に、芸術としての詩の形を世界文学のなかに探り、ペルシア語という土壌において花開かせる道を模索し続けた。彼の詩的探求は、韻律リズムを排除した「非韻律詩」ジャンルの創成に結実する。本論文では、何よりもまず、シャームルーによる政治的抵抗ではなく、彼の韻律排除の主張と「非韻律詩」の創成に関わる文学的伝統への抵抗について論じることを、第一の目的とする。

### 2. 「非韻律詩」 she'r-e manšūr の位置付け

本論文で「非韻律詩」の訳語をあてた she'r-e manšūr は、直訳すると「散文の詩」を意味する。she'r-e manšūr は、prose poem と訳されることも多いが、伝統的な文学概念に依れば、「韻律リズムと定形脚韻をもたない詩」を示す。シャームルーは、翻訳の模倣体として登場した she'r-e manšūr の形式を、ジャンルとして確立した。

イランにおける先行研究では、ペルシア詩を「西洋詩の基準にあてはめる必要はない」との理由により、she'r-e manšūr を「自由詩」、あるいは、「散文詩」として分類し性格付けすることを拒んできた。また、文学史上、she'r-e manšūr は必ずしも統一的な系譜をもつものではなく、位置付けも明確ではない。本論文での第2の目的は、she'r-e manšūr の文学研究一般、および、ペルシア文学史における位置づけを提示することである。

### 3. ニーマーの詩学からの脱却

シャームルーの文学的伝統への抵抗は、シャームルーの師であり、同時にシャームルーと並び、20世紀イランの二大詩人と評されるニーマー・ユーシージ Nimā Yūshij (1897-1960) との相克において、最も明確な形で現れる。

ニーマーは、近代ペルシア詩の創始者として位置付けられる。同時代において、「ニーマー自由詩」と呼ばれる彼の自由韻律と、のちに「社会象徴主義」と評された描写・作品構成の技法、あるいは、一地方に特有の言語や風物を基礎に置いた詩的空間の構築などに、影響を受けない詩人はいなかったと言ってよい。シャームルーの非韻律詩をペルシア文学史の文脈において位置付けるならば、ニーマーが確立した自由韻律詩からの脱却として捉えうる。

シャームルーは、詩作の初期において、ニーマーの自由韻律と手法を踏襲しながらも、のち、ニーマーが詩の本質的要素として死守した韻律リズムを、「詩想の自発的流れを妨げるもの」として否定し、排除した。さらに、これに伴う詩学上の両者の対立点は、シャームルーの言葉と詩に対する認識そのものの特徴を浮き彫りにするだけでなく、イランの〈近代詩〉から〈現代詩〉への移行として捉えることができる。シャームルーの非韻律詩作品とそれに関わる詩学を、〈脱ニーマー〉の観点から論じることが、本論の第3の目的である。

### 4. 詩の「音楽性」 mūsīqī の再検討

本論文の第4の目的は、「音楽性」 mūsīqī 概念の再考である。

シャームルー詩がもつ豊かな音楽性は、韻律を失った彼のことばが〈詩〉として受け容れた最大の要因である。同時に、非韻律詩研究においても、「音楽性」は、非韻律詩の〈詩〉性を証明するものとして捉えられ、音楽的特性をもつ言葉は全て〈詩〉であるとの定義まで提起された。しかし、シャームルー自身は、これとは対照的に、詩の〈純粹性〉を追求することにより、非韻律詩の成立を試みている。

本論では、シャームルー詩の「音楽性」概念を、作品の構成技法をも含むより広義の「リズム」として捉え直し、彼に独自の表現世界を成立させている作品と言語の構造を分析する。

## II. 論文の構成

本論文は、以下の構成から成る。

序論

第一章 シャームルーの非韻律詩 *she'r-e manšūr* の位置付け

第二章 非韻律詩の詩学

第三章 非韻律詩のリズムと作品構成の技法

結論

### 序論

序論では、近現代ペルシア詩の文学史的状況を示し、先行研究について述べるとともに、文学研究一般からみた「非韻律詩」 *she'r-e manšūr* の位置づけを新たに提示する。

1) 文学史を一見すれば、*she'r-e manšūr* は総じて、詩行 line の存在に依拠した「完全自由詩」 *avant-garde free verse* に類する形態をもつものであることが指摘できる。また、例えば、フランス詩において、「散文詩」が、伝統詩法に絡め取られたままの「自由韻律詩」とは別の場所から発生し、ふたつの並行する流れをなしていたのとは異なり、ペルシア詩の *she'r-e manšūr* の主潮流は、自由韻律詩自体から脱皮する形で登場した。

2) また、アラブ近現代詩において、当初未分化であった詩の新形式が、*shi'r manthūr* (散文の詩) の名で呼ばれる「自由詩」的ジャンルと、*qaṣīda al-nathr* (散文のカスィーダ) と呼ばれる「散文詩」の2つのジャンルへと徐々に分化していったのに対し、ペルシア詩では、「散文詩」 *prose poem / poeme en prose* に相当する形態は、ほとんど発達しなかったことが指摘できる。このことは、<散文>による<詩>という文学観念上の相克を、*she'r-e manšūr* が一身に背負ったことを示している。

3) 本論では、*she'r-e manšūr* が自由詩的な形態を有することを踏まえたうえで、これを自由詩と散文詩の同時発生的ジャンルであると捉え、敢えてそのいずれでもない「非韻律詩」の訳語を用いることとする。

## 第一章 シャームルーの非韻律詩 *she'r-e mansūr* の位置付け

第一章では、シャームルーの非韻律詩の創成を<脱・ニーマー自由韻律>の潮流として位置付け、その具体的な過程を明らかにする。初期においてニーマー自由韻律詩を奉じたシャームルーは、第2詩集『決議』*Qa'tnāme*.の出版を契機として、ニーマーと決裂した。同詩集に見られる“ニーマー詩“から飛躍したシャームルーの詩的技法、および、書簡とインタビュー資料から読みとれるニーマーとの詩学上の決裂を分析する。

1) 『決議』において、シャームルーは、ポール・エリュアールや、パブロ・ネルーダらの影響の下、苦悩する人民への共感と巨大権力による暴虐との闘争を、叫びとして謳いあげた。これらの未だ未熟な作品のなかで、シャームルーは、言葉を素材として詩的世界を構築する“ニーマー的な“手法から、言葉に命を吹き込み、叫びとして噴出する術を掴んだことが指摘できる。

2) さらに、同詩集に収められた、シャームルーの初めての非韻律詩「シャツの赤い花まで」*Tā shokūfe-ye yek pīrāhan*.では、もはや自由韻律詩の枠組みに収まりきらない、ほとばしるリズムと次々に変化する多様な構成を見ることができる。また、分析を通して、主に平行構造と反復とによって織りなされる隠喩の重なりが、重層的な叫びとも言いえる言語を獲得していることが明らかになる。

3) 詩集『決議』の出版による、非韻律詩の提示は、韻律リズムを詩の本質として奉じるニーマー詩学と、シャームルーの目指す<詩>との齟齬を露呈した。ニーマーは、同詩集に対する非難の書簡の中で、美学的要素、および、情報伝達媒体としての韻律リズムを絶対視し、韻律に体现される詩の<フォーム>を、あくまで詩の<内容>に対する<容れ物>として捉えている。ここに、<詩>と韻律を切り離し、フォームを詩そのものであるとみなす、シャームルー詩学との決定的な相違を見ることができる。

## 第二章 非韻律詩の詩学

第二章では、韻律を排除した<詩>の成立に関わるシャームルーの詩学を総体的に明らかにする。

1) ペルシア詩における文学史的イベントとも言える、韻律を排した詩の登場は、シャームルーにおいては、詩が詩人の無意識を介在として「生まれてくる」という個人的な体験の産物であった。彼は、詩を一切の改変なくして「生まれたままに」提示すべきであると主張し、詩の<フォーム>は<詩想>と一体のものとして、あるいは、<詩想>そのものとして生まれてくるとの認識を示し、韻律リズムを「詩人の詩想をゆがめる原因」として完全否定した。

2) シャームルーは、詩人の無意識の介在を創作行為の中心に据えたが、シャームルーの無意識性は、外界と詩人の内的感覚とのつながりの仕組みに関する無意識であり、詩人の内部と外界との関連を否定するものでは決してない。

さらに、彼は、詩人の表現行為の明確な目的性を否定し、ペルシア詩における「純粹詩」she'r-e mahz (あるいは、she'r-e nāb) の確立を目指したが、彼の述べる「純粹詩」は、ポーが提唱した pure poetry そのものとは必ずしも一致しない。シャームルーの「純粹詩」は、詩の音楽への昇華のごとき接近を意味せず、詩を<意味>の世界から切り離そうとするものではなかった。彼が、詩を音楽や舞踊や絵画に喩えるとき、それは、「自らを示すこと以外に目的をもたない」という表現行為の存立の在処に限っての<純粹性>を意味する。

また、シャームルーは、個々の言葉が文字通り“背負っている”背景と暗示の力を極めて重要視し、さらに、言葉はそれが指す事物そのものの存在性を詩において獲得すると信じた。このことは、シャームルーの作品の特徴性を、詩学の観点からも裏付けるものであると結論づけることができる。

### 第三章 非韻律詩のリズムと作品構成の技法

第三章では、シャームルーの非韻律詩の「リズム」の分析を行う。

1) 先行研究において提起される詩の「音楽性」*mūsīqī* の概念は、類音反復や、音韻と内容との“調和”のみに限定して捉えられてきた。本論では、シャームルー詩に観察される音韻技法を、より広義の「リズム」*rhythm* の概念によって捉え直し、「自由詩」に特徴的な<詩行>の構成や、詩行音韻単位としての詩行と統辞的単位としての詩行との関係性、作品の構成技法など、詩において観察し得る、あらゆる音韻事象、および、音韻事象と他の要素との関連をも含むものとして分析する。

2) シャームルーの音韻技法とそれに基づく作品構成上の特徴は、等価構造の反復の技法に集約される。とくに、平行構造の中で非平行関係に置かれる語句の反復、平行的な反復の中に提起される詩的要素の変容は、作品の中で最も有効な隠喩として機能しており、シャームルーの詩に独自の時間性と、非収束性、そして、事物の存在性に基づく濃密な詩的空間を生じさせていると結論づけることができる。

### 結論

1) 本論文では、ペルシア詩における「非韻律詩」が、自由詩的形態を持ちながらも、<散文>による<詩>の表現という文学観念上の矛盾を内包したジャンルであることを提示した。また、文学史的には、非韻律詩の最も重要な潮流が、ニーマー自由韻律詩からの脱却として生じたものであることを指摘した。

2) また、シャームルーによる文学的抵抗と非韻律詩ジャンルの創成も、ニーマー自由韻律からの脱却という過程を経て成立したものであると位置付けた。シャームルーの<脱ニーマー>は、初期作品では、自由韻律に収まりきれない詩人自身のリズムと内なる叫びの噴出として見ることができる。

3) 詩学の観点からは、ニーマーが、韻律リズムを詩の成立に不可欠なフォルムとして位置付け、これを用いて完結した詩的空間を提示しようとしたのに対し、シャームルーは、詩を、それ自体であるフォルムを伴って自発的に生じる存在であると捉え、韻律を否定し

た点で、決定的な相違をもつことを明らかにした。さらに、シャームルーが、詩において、事物そのものであると信じる言葉の、時に無関係な並置から生じる暗示の力によって、ことばとことばの間を掴み取ろうとした点で、ニーマー詩とは異なる、詩の<現代性>を獲得していることを指摘した。

4) 同時に、シャームルーの「音楽性」は、<調和>の観点からのみ捉えられるべきものではなく、作品自体を成立させている仕組みであることを指摘した。とくに、平行構造の中で非平行関係に置かれる語句の反復、平行的な反復の中に提起される詩的要素の変容が、作品の中で最も有効な隠喩として機能しており、シャームルーの詩に独自の時間性と、非収束性、そして、事物の存在性に基づく濃密な詩的空間を成立させていることを明らかにした。